

相互学習による協働の勧め

工学研究科長 日野 泰雄 (ひの やすお)



技術革新は想像以上に速い。工学はその先端にあると言える。しかし、新しい技術に驚く期間は短く、すぐに社会に定着し、場合によっては陳腐化する。パソコンや携帯電話はその最たるものであろう。しかし、本当にそれらの機能が必要であり、また使いこなせているのかという疑問である。高齢者用に「簡単携帯」なるものが販売されていることから想像できる。1960年代後半に始まった鉄道駅の自動券売機や自動改札に高齢者は戸惑い、今また高度化した多機能券売機の前で途方に暮れている。情報通信やコンピュータ機能満載の機械類は簡単に修理できず、町の修理工場では自動車の故障に対応できなくなっている。つまり、世の中のほとんどの物やシステムは、アナログからデジタルへ移行し、その仕組みがブラックボックス化していると言っても過言ではない。

今般の東日本大震災とそれによる福島原子力発電所の事故など、世界一の安全神話が崩れたと言われているが、そもそも、その仕組みを知らせていなかった、あるいは理解できていなかったこともその背景にはある。

一方、近年、行政等の公的取り組みについては特に説明責任が問われ、国民・市民も主体的関与を求められる社会になりつつある。しかしながら、一般市民は十分な情報や学習の機会が与えられていない。例えば、高速道路の割引相当分が税金で補填されていたことや、太陽光発電の買電負担分は電気料金に上乘せされること、あるいは昨今自転車利用促進といったかけ声と、その裏腹に起こる交通事故とその防止のための取り締まりなども、どこか利用者不在の議論のように思える。

交通安全やまちの美化など、些細なことからまちづくりに取り組む住民(市民)中心の活動は、行政の理解と専門家の関与によって「協働」に発展し、いずれ *Civic Trust* といった先端的とりくみにまで昇華するかもしれない。そこで不可欠なことは「相互学習」であり、道具を使いこなすための科学技術と人とのインターフェイスのみならず、防災・減災のための互助・共助の仲介者としての役割を、我々技術者は期待されているのではないだろうか。